

# 令和六年度入学者選抜学力検査問題

(前期日程)

## 国語

(注意)

- 1 問題紙は指示があるまで開いてはいけません。
- 2 問題紙は本文二ページです。答案用紙は三枚あります。
- 3 答えはすべて答案用紙の指定のところに記入しなさい。
- 4 字数制限のある解答欄への記入に際しては、句読点を一字と数えなさい。
- 5 問題紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

補 足 説 明

科目名：国 語

ルビを追加します

- |                                   |                                  |                                  |                                  |                                   |
|-----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|-----------------------------------|
| 3<br>ページ<br>気持 <small>きもち</small> | 3<br>ページ<br>聞え <small>きこ</small> | 2<br>ページ<br>過し <small>すご</small> | 1<br>ページ<br>暮し <small>くら</small> | 1<br>ページ<br>上野行 <small>ゆき</small> |
|-----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|-----------------------------------|

一 次の記事は、アジア太平洋戦争末期の東京で暮らす医学生・太郎を主人公とする物語の一節で、所用のため一時的に東京を離れ〇村を訪れた太郎が、隣町のK町の駅で知人のあき子と対話する場面です。これを読んで後の問いに答えなさい。

その日の午後、あき子は、上野行の汽車を待つ土屋太郎と、K町の駅のプラットフォームを歩いていた。戦争の前、夏になるといつもショーツをはいた娘たちが二、三人寄りかかつて笑い声を立てていた改札口には、制服の憲兵が手持ち無沙汰な顔をして立っている。汽車の来ないレールは枯れた野原を横切り、鉛色の鈍い光を放っている。太郎は黙っている。硬くて平らなコンクリートの上を歩く規則正しい靴の音。<sup>(1)</sup>ホソウ道路のない高原へ来てから忘れていた東京の街の記憶。もうそんな街は焼けてしまった。丸の内や銀座や日比谷……清潔で、ハイヒールの硬い音が短く響くアスファルトの道。日比谷公園の柵に沿った赤煉瓦の道は、音楽会の帰り、樹の下闇で、人々の靴の音が高く、春先には公園の沈丁花<sup>じんちやうげ</sup>が匂って来た。歩くことさえも愉しかった戦前の東京。その頃東京に、又夏の高原に、うんざりするほど集<sup>あつま</sup>っていたケイハク<sup>(2)</sup>で、社交的で、無害な青年たち。贅沢<sup>ぜいたく</sup>で、気まぐれで、人の好い娘たち。彼らの或る者は戦争へ行った。彼らのある者は「徴用<sup>(注1)</sup>」を逃れるために父親の軍需会社の事務室へ行った、彼らのある者は、——昔夏毎<sup>むかしごと</sup>に遊び暮<sup>まわ</sup>っていたK町の別荘に「疎開<sup>(注2)</sup>」してテニス・コートへ行くためではなく、いもや麦の買い出しに行くために自転車を乗り廻<sup>まわ</sup>している。あき子は、改札口を出入りする女たちが、尾羽打ち枯<sup>(注2)</sup>らしたとはいっても、どこかに他の町の疎開者とはちがう昔の風俗をとどめていて、空色に塗った自転車や、籐<sup>とう</sup>で編んだ買物カゴ<sup>(3)</sup>や、細い毛糸の飾模様のあるスウェーターや、立ち話をしながら腰に手をあてて上半身をくねらせている少女の姿勢までが、土地の人から彼らをはつきりと区別しているのを見た。土地の人々には、男にも女にも色彩がない。白もなく、緑も水色も赤もなく、黒と茶との混<sup>ま</sup>ったような汚れた一色があるばかりで、プラットフォームの片すみに集り、一人の若い男をかこんでいる。その小柄な、痩せた、血色のわるい男の胸にだけ赤い襷<sup>(注3)</sup>がかかっている。五、六人の紋付を着た老人と二、三人の若い男女の他には、子供ばかり。畠<sup>はたけ</sup>の間の遠い道を墓場へ行く田舎の葬式の、埃<sup>ほじり</sup>にまみれ、疲れて物もいえなくなった一団のようにも見える。並んだ顔の

陽に焼けて銅の仮面のように動かない表情。長い間見つめていてもどのような感情がそこに匿かくされているのかわからない無表情という表情の中に、戦争で親や子を失った日本国民の悲しみが現れているのだろうか。出征兵士を送る興奮はなくなり、悲しみをなければ、ただ諦めがあるのだろうか。

突然、一〇歳ぐらいの金髪の子供が、プラットフォームに駆けこんで来た。自分の腕時計と駅の大時計とを何度も見くらべながら、大きな声で叫ぶ。

(注4)  
——Ganz genau! Ganz genau!

時計を持っていることが嬉しそうに、それが駅の大時計と合っているということだけで無上の幸福を味わってでもいるかのよう、弾んだ少年のソプラノが、広いプラットフォームに高く響く。出征兵士をかこむ一団の人々は見向きもしない。あき子は、少年が笑っているのを見た。心から嬉しそうその顔。あれほど嬉しそう人間の顔を見ずにもう何年過したことだろう。少年の親たちもあれほどの愉しさを味わうことはあるまい。戦争で祖国を失おうとしている大人は、自分の時計が合っているということ、又その他の如何なることによっても、子供たちのように心の底から充ち足りた幸福を味わうことはできない。あき子は、ドイツ人の子供の声を聞き、笑顔を見つめながら、長い間忘れていた幸福はもう子供の世界にしかないのかも知れないと思いつつ、いつの間にもどちらから立ちどまったのか、太郎も傍そばに立ってその子供を見つめていることに気がつく、彼も又見Aず知らずの外  
国人の子供のささやかな幸福に心を動かされているのではないかと思つた。

太郎は、〇村の過ぎ去つた一週間のことを考えていた。上野駅の空襲警報、高崎の空襲、身のまわりのもの一切をつめこんだ袋を持ち、やっと生きのびたという気持ちで同じプラットフォームに降りたのは、たしかに一週間前だ。しかし、時の流れたという実感は少しもない。一週間の出来事は多かつたが、何もかも一日に起つたようで、同時に、無秩序に想おもい出された。葉桜の東京のことを考えると、雪のある山々から吹き下おろす風も、落葉松からまつの煙るような若芽も、竹たけさんの家のイロリ4辺も、まだK町の駅を

少しも離れてはいないのに、遠い殆どあり得べからざる世界の風物のように思われ、そのなかに住む人々、竹さんも、諧謔に長じながら何処かに暗い影を持つような画家も、又あの飄然と来て飄然と去った吉川という青年や、その青年を追いかけたのか又他の誰かを追ったのか奇怪な家宅ソウサクを強行した水原の脅すような存在も、遠い世界のなかの実在さえも疑わしい人物物語の幾人かの主人公のように思われる。一度汽車に乗ってしまえば、碓氷峠のトンネルをぬけ、天にとどく妙義の山々の麓を廻り、一時間の後には、艦載機が乱舞し、絨緞爆撃の地を揺がす轟きが聞え、燃えあがる街の焰と崩れ落ちる家並の響きと、サイレンや怒号や高射砲の音の騒然と沸き立つ世界へ帰るのだ。又空襲の後の、それは又次の空襲の前でもあるが、灯火管制の夜のあの静かな時。病院の廊下の端で熱のある患者のために氷を割る音が患者の苦しみの時間を刻むように聞える。その苦しみだけが、静かな夜のなかに確実に存在するただ一つのもののように思われる時。夜は眠り、朝はめざめ、たとえ未来に希望はなくても、爆撃のない高原の平和な現在からどんなに遠く隔った世界が碓氷の彼方に拡まっていることだろう。病院のやくざな防空壕とGホテルのロビーとの間には、無限の距離があり、一方のなかにいれば、他方の存在はどうしても信じられない。しかし、実は汽車の一時間、沢山のトンネルを出入りしながら降るアプト式鉄道のゆるやかな二拍子、降るに従って気圧が増し耳の鳴る一時間が、二つの世界を隔てているだけなのだ。もう間もなく、機関車の前にも、客車の屋根にも、満員の人間を乗せた列車が入って来る。……

あき子は、義弟の話をしていた。

——……おかげで助かったのよ。でも何だか無造作ね。飛行機に乗っているとああなるのかしら？ きつと地上のゴタゴタしたことが、気にならなくなるのでしょうか。つまらなくて、滑稽に見えるのね。飛行機では生きているのが不思議なくらいでしょう、自分が今生きているということ一杯で、他のことは考えられないのよ。あたしだって、焼けだされてから、そうなった。それがもつと徹底していて、一寸世の中になじめないという感じ。何処か別の星から来た人みたいだったわ。戦争についてはあたしと意見がちがうけれど、話していると気持がよかった。余計なものがなく、さっぱりしていて……

太郎は、あき子を見た。前を開いた黒の外套がいとちうの間から、赤い絹のブラウスの胸が覗のぞいている。一週間前のホテルのロビーの印象。林をはずれた道の曲り角で、振りかえると夕陽に燃えるようだったブラウス。東京に帰って二、三日もすれば、高原の誰も彼も皆忘れてしまっただろうが、あき子だけは忘れないだろう、と太郎は思った。昔知っていた関哲哉の姉とはちがう。相変らずつき放すように歯切れのよい言葉を早口に喋しゃべるが、昔は想像もできなかった打ちとけた調子が何処かにある。相談の性質がそういうものだったからか。いや相談のためばかりではなく、このあき子に会うためにわざわざ東京から出て来たのではなかったか、と太郎は思う。それは馬鹿げた考えだった。しかし、その考えよりもっと馬鹿げた感情が自分のなかにあることに彼は気がついた。あき子の話しているのは、義弟のことだった。会ったことのない青年は、その体格、その決然たる態度、又何よりもその生活の緊張の度合によって、身体のあまり丈夫でない太郎を圧迫した。あき子は、ある共感を素直に語っているにすぎない。しかし、あき子と自分との間にはそのような共感があるだろうか。そう思うと、太郎はあき子の話すのを聞きながら、一種の不安を感じた。その不安は殆ど苦しみになるほど大きくなり、彼は、彼を東京へはこんで行く汽車の入って来るまで、東京のことも、高原の一週間の出来事も、<sup>B</sup>何も彼も忘れてその混乱した感情の渦のなかに巻きこまれたままでいた。

（加藤周一『ある晴れた日に』岩波書店、二〇〇九年、九〇〜九六ページ、一部改変の上、引用、初刊は一九五〇年）

- (注1) 戦時に国家が国民を動員して強制的に業務に就かせること。
- (注2) 落ちぶれてみすばらしくなること。
- (注3) 徴兵された者が出征する際、赤い襷をかけて見送りを受けた。
- (注4) ドイツ語で、正確、ちようどぴったり、の意味。
- (注5) ふらりと来たり去ったりするさま。
- (注6) 群馬県と長野県の境にある峠。
- (注7) 地域一帯を徹底的に無差別に爆撃すること。
- (注8) 航空機を攻撃するための大砲。
- (注9) 急こう配の路線を滑らずに走行するための歯車式鉄道。
- (注10) 海軍の航空隊に動員されている。

〔問一〕 傍線部(1)～(5)の片仮名を漢字に直しなさい。

〔問二〕 この文章の前半、あき子の視点で描写される箇所について説明した次の文の空欄に当てはまる対比的で適切な語句を記しなさい。

あき子の視点で、K町の（ア）の場面を見つめながらそれが東京の（ア）の状況、さらに東京の（イ）の情景と対比され、日本の置かれている状況が捉えられている。

〔問三〕 傍線部A「彼も又見ず知らずの外国人の子供のささやかな幸福に心を動かされているのではないか」について、あき子は太郎がどのようなことを感じていると捉えたか、八〇字以上一〇〇字以内で述べなさい。

〔問四〕 この文章の後半、太郎の視点で描写される箇所の一段落目について説明した次の文の空欄に当てはまる適切な語句を記しなさい。

自分が暮らしたり滞在したりしたことのある異なる（ウ）のあまりに対極的な状況を見つめ信じがたい思いに捉われつつ、そのどちらもが（エ）であることを受け止めようとしている太郎の内面が捉えられている。

〔問五〕 傍線部B「何も彼も忘れてその混乱した感情の渦のなかに巻きこまれたままでいた」について、あき子のお話を聞く前と聞いた後で太郎の感情はどのように変化したか、その内容を二〇〇字以上二四〇字以内で述べなさい。



二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中ごろ、片田舎に男ありけり。年<sup>a</sup>ごろ、こころざし深くてあひ具したりける妻、子を生みて後、重く煩<sup>わづら</sup>ひければ、夫、添ひ  
るてあつかひけり。限りなりける時、髪<sup>ゆ</sup>の暑げに乱れたりけるを、結<sup>む</sup>ひ付けんとして、かたはらに文<sup>ふみ</sup>のありけるを、片端<sup>は</sup>を引き破  
りてなむ結びたりける。

かくて、ほどなく息絶えにければ、泣く泣くとかくの沙汰などして、はかなく雲煙<sup>くもけぶり</sup>となしつ。その後、あとのわざねんごろ  
に営むにつけて、なぐさむ方もなく、恋しく、わりなくおぼゆること尽きせず。「いかで今一度<sup>b</sup>、ありしながらの姿を見ん」と涙  
にむせびつつ明かし暮らす間に、ある時、夜いたう更けて、この女、寢所へ来たりぬ。夢かと思へど、さすがに X なり。  
嬉しさに、まづ涙こぼれて、「さても、命<sup>しやう</sup>つきて、生<sup>なま</sup>を隔てつるにはあらずや。いかにして来たり給へるぞ」と問ふ。「しかなり。  
うつつにてかやうに帰り来たることは、ことわりもなく、ためしも聞かず。されど、今一度見まほしくおぼえたるこころざしの  
深きによりて、ありがたきことをわりなくして来たれるなり」と語る。そのほかの心<sup>こころ</sup>の中、書きつくすべからず。枕をかはず  
と、ありし世につゆかはらず。

暁起きて、出でさまに物を落としたるけしきにて、寢所をここかしこさぐり求むれど、何とも思ひ分かず。明けはて後、跡  
を見るに、元結<sup>もとゆひ</sup>一つ落ちたり。取りてこまかに見れば、限りなりし時、髪結<sup>ゆ</sup>ひたりし反故<sup>ほんぐ</sup>の破れにつゆもかはらず。この元結は、  
さながら焼き葬<sup>はぶ</sup>りて、きとあるべきゆゑもなし。いとあやしくおぼえて、ありし破<sup>やぶ</sup>り残<sup>のこ</sup>りの文のありけるに、Y 継ぎて見るに、い  
ささかもたがはずその破れにてぞありける。

「これは近き世の不思議なり。さらにうきたることにあらず」とて、澄憲<sup>ちやうけん</sup>法師の人に語られ侍りしなり。

昔、小野篁<sup>おののたかむら</sup>の妹の失せて後、夜な夜なうつつに来たりけるは、物云<sup>い</sup>ふ声ばかりして、さだかには手にさはる物なかりけるとぞ。  
おほかた、こころざし深くなるによりて不思議をあらはすこと、これらにて知りぬべし。 Z。

(鴨長明『菟心集』による)

(注) ○雲煙となしつ——火葬した。

○あとのわざ——故人を弔う仏事。

○元結——髪を結ぶためのもの。

○反故——書き損じ。反故紙。

○澄憲——天台宗の僧。説法の名手として知られた。

○小野篁——平安時代の公卿、漢詩人、歌人。

〔問一〕 傍線部 a「年ごろ」、b「ありしながらの」、c「さらにうきたることにあらず」をそれぞれ現代語訳しなさい。

〔問二〕 空欄 X に入る言葉を、本文中から三文字で抜き出しなさい。

〔問三〕 傍線部 Y「ありし破り残しの文のありけるに、繼ぎて見るに」について、適宜言葉を補いながら、わかりやすく現代語訳しなさい。

〔問四〕 空欄乙に入る鴨長明の言について、最も適切なものはどれか、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア この世にも、もの思ふ人の往生を願ふことにて侍らば、いかに心かしこからん。たとひ同じ心なる仲とても、幾世かはある

イ いかにもいかに、心の師となりて、かつは前の世の報ひと思ひなし、かつは夢の中のすさみとも思ひけして、一念なりとも悔ゆる心を発すべきなり

ウ 凡夫の愚かなるだにしかり。いはんや、仏菩薩の類ひは心をいたして見んと願はば、その人の前にあらはれんと誓ひ給へり

エ 我も人も、先の世を知らねばこそはあれ、何事もこの世一つのことにては侍らぬを、空しく心をくだき、走り求めて、かなはねば、神をそしり仏をさへうらみ奉るは、いみじう愚かなり

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合で送り仮名を省いたところがあります）。

濟陰<sup>ノ</sup>黄允<sup>、</sup>以<sup>テ</sup>雋才<sup>ヲ</sup>知<sup>ラル</sup>名<sup>ヲ</sup>。泰見<sup>テ</sup>而謂<sup>ヒテ</sup>曰、「卿高才絶<sup>レ</sup>人<sup>ニ</sup>。足<sup>ル</sup>成<sup>ス</sup>偉器<sup>ヲ</sup>。年過<sup>グ</sup>四十<sup>ヲ</sup>、声名著<sup>レン</sup>矣。然<sup>レドモ</sup>至<sup>リテ</sup>於<sup>ニ</sup>此際<sup>ニ</sup>、当<sup>ニ</sup>深自匡持<sup>ズ</sup>。不<sup>レ</sup>然<sup>ル</sup>、将<sup>ニ</sup>失<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>矣。」後司徒袁隗欲<sup>ス</sup>為<sup>ニ</sup>從女<sup>ノ</sup>求<sup>ム</sup>婚<sup>ヲ</sup>。見<sup>テ</sup>允嘆<sup>ジテ</sup>曰、「得<sup>ル</sup>媾<sup>コトヲ</sup>如<sup>クナラバ</sup>是<sup>ノ</sup>足<sup>レリト</sup>矣。」允聞<sup>キテ</sup>而黜<sup>チ</sup>遣<sup>ハシ</sup>其妻<sup>ヲ</sup>。妻請<sup>ヒテ</sup>大会<sup>ニ</sup>宗親<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>別<sup>ヲ</sup>。因<sup>イテ</sup>於<sup>ニ</sup>衆中<sup>ニ</sup>攘<sup>ハ</sup>袂<sup>ト</sup>数<sup>ヘテ</sup>允隱匿<sup>セル</sup>十五事<sup>ヲ</sup>而去<sup>ル</sup>。允以<sup>テ</sup>此<sup>ヲ</sup>廢<sup>セラル</sup>於<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>。

（北宋・司馬光『資治通鑑』卷五十五による）

（注）○濟陰——郡の名。現在の山東省南西部。

○黄允——人名。

○雋才——俊才。

○泰——後漢の儒者郭泰の名。

○偉器——すぐれたはたらきのある人物。大器。

○匡持——正してまもる。

○司徒——官名。後漢の高官である三公（太尉・司徒・司空）の一。教育をつかさどる。

○袁隗——後漢の政治家。

○従女——めい。

○黜遣——放逐する。追放する。

○宗親——親族。一族。

〔問一〕 傍線部 a 「不然」、傍線部 b 「因」について、送り仮名を含む読み方を平仮名で答えなさい(現代仮名遣いで書いてもよい)。

〔問二〕 傍線部 A 「当深自匡持」を書き下し、それを平仮名で書きなさい(現代仮名遣いで書いてもよい)。

〔問三〕 傍線部 B 「得婿如是、足矣」について、「是」の内容を明示しつつ現代語訳しなさい。

〔問四〕 傍線部 C 「允以此廢於時」で、黄允が世間の評判を大いに失うことになった理由について、「此」の指すものを明らかにしながら、七〇字以内で書きなさい。

